

沈黙の少女

河内愛子
こうち

1 出生

窓の外を粉雪が舞っていた。

「愛子、野口さんと共に、赤ちゃん見に行こう。今朝、生まれたんだよ」

朝御飯が終わると、父が言った。さつき無口で若い印刷屋さんがきて、玄関で父に二言か三言話すと、すぐ帰って行った。報告にきたんだろう。さつそく黒い長靴をはき毛糸の帽子をかぶった。父も黒のインバネスを綿入れの着物の上にかけて爪革つまかわつきの高い下駄をはいた。父はいつも和服で洋服は一枚もない。わたしは時々、なんで父さんはよその父親みたいに背広を着てネクタイをしないのかと思うけれど、すぐ忘れてしまう。わたしは六歳で弟も妹もないから、赤ちゃんが大好きだ。お風呂屋では若い母親に抱かれた可愛い赤ちゃんによく会う。母に身体を洗ってもらいながら赤ちゃんに気をとられ、あのふつくらしたほったや握った手にさわってみたいと思う。

野口印刷所の野口さんは少年のころ父の教会の信者になり、いまはすぐ近くにお店を持ち、教会が必要とするすべての刷り物を引き受け、電話の取り次ぎもいつもしてくれるから、親戚同様の間柄だ。教会の門を出て三分ほど歩くと商店の並ぶ二日町に出る。老舗の大きいお菓子屋、綿屋、髪油屋などの子供はみな幼稚園にくるから、他人の街ではない。二日町を渡って少し歩くと野口印刷所の一枚ガラス戸の入り口に着く。一九三六年は街じゅうがどうやら戦争のおかげで活気が流れていた。ガラス戸をあけると狭い板の間に据えつけた印刷機がガタンコガタンコと活字の刷り込まれた白い紙を引つ切らず吐き出していた。その脇を通って一段高い六畳間に入ると、小さい布団に眠っている生まれたばかりの赤ちゃんそはと、長火鉢の傍そばに座った白髪のおばあさんがいた。

ざぶとんに座ると父は「元氣な赤ちゃんで良かったですな。いや、おめでたい」と笑った。わたしは赤ちゃんのほったやふわふわ薄い髪の毛にさわったりしていた。嬉しかった。やつとお母さんが台所からお茶を運んできた。今朝赤ちゃんを産んだばかりで、もう働いている。色白で二十二、三歳ぐらいだったか。わたしにもっこりしてから、父に挨拶した。外は寒いのに狭い庭で南天やサボテンの鉢やらに水やりしていた太って大きいおじいちゃんも入ってきて父に挨拶した。みんな嬉しそうだった。遠慮して大して話はしないけれど。

「幼稚園に入ったら一緒に遊ぼうね」

髪の毛にさわりながら、わたしは大人に聞こえないはずの声で言った。そのころには、もう自分が幼稚園は終わっているとは思わなかった。赤ちゃんは静かに眠っていた。帰りぎわに父が笑って

言った。

「いい子だね。しずこちゃんだね」

面白いことに赤ちゃんの名は志津子ちゃんになった。家族の願いはおとなしく優しい娘であれ、だったろうが、クリスチャンの父親には「柔和で平和ならしむるものであれ」の一句があったかもしれない。

世の親が何を願おうと、その一カ月のうちにクーデター二・二六事件が起き、首謀者十九人が死刑になった。

四月にわたしが小学校に入ったとたん、北京郊外の盧溝橋ろこうきょうで日本軍と中国軍が衝突し、大戦争の発火点になった。それでも教会は平和（のんき）な場所だった。一九四〇年、もはや外の世界では見られない豆電灯とデコレーションに輝くツリーを見せに、父親は四歳の志津子をクリスマス札拝に連れてきた。たまたま玄関にいた小学生のわたしは、「しづちゃん、よくきたね」と彼女の手を引きツリーの前に連れて行った。幼な児は眼をまん丸く開き黙っていつまでもツリーを見ていた。オルガンが鳴った。わたしは、父親のところに志津子を連れて行った。

子供にとって六歳の差は大きい。志津子が二日町を渡って教会の幼稚園にくるようになった時、わたしは既に小学五年生だった。志津子には二歳下のまさる、四歳下の双児の妹たちが生まれていて、近所にはいくらかも遊び友達があった。長女のかかりは祖母になる。祖母は孫を熱愛する。三歳で

既に志津子は三輪車を持っていた。大きなお祭りには必ず連れて行かれた。ばあちゃんは、孫が欲しいと言う前にさつさと何でも買ってくれた。綿菓子、風船、風車、少したつて金魚、ひよこ、志津子は近所の子供たちのスターだった。たくさんのおもちゃを持っていて、何でも気前よく貸してくれる。まちがって壊しても「いいよ、いいよ」と怒らない。大人になってもこの個性は変わらなかったかもしれない。

そうは言っても、志津子の育った環境はあくまで庶民のものであった。少しちがっていたのは父親だけ。近所の遊び友達の中で二日町通りを渡って志津子を幼稚園に通わせたのも、もちろん父親であった。幼い子の集まりだから、転ばしたり、髪の毛を引っ張ったりのやんちゃな男の子がいる。痛くても悔しくとも志津子は泣かない。一方では母とか祖母にしがみついて離れず、きかん坊にちよつと小突かれても泣き出す男の子もいる。口にこそ出さないが、志津子は泣き虫は大嫌いで、心の中では彼らを馬鹿にしていた。近所の遊び仲間がそういう甘ったれはいなかったから。ただ幼稚園のおかげで文字や言葉や歌をたくさん覚えたので、小学校の勉強は全く困らなかった。

2 逆転

一九四三年、志津子は近くの友達と一緒に国民学校に入った。太平洋戦争開始後の三年目、国は

敗色濃厚で父親は紙や機械の油の入手に苦勞していたが、幼い子供らにとっては、まだ遠い世界のできごとだった。弟と喧嘩したり、二人の妹のお守りをしながら、遊ぶ時間にも事欠かない。大人の世界では紙や油の統制はいよいよ厳しく、活版の活字も金属製となれば、お上から差し出せとの命令がくる。父親には赤紙の代わりに、長町の軍需工場で働けとの徴用令がきた。長町は遠い。父親は蒼ざめやつれた顔で、自転車通勤を始めた。一九四五年四月、志津子は三年生になった。一方、わたしは女学校三年生である。のんきさ加減は国民学校三年と女学校三年と大した開きはなかったかもしれない。

一九四四年に始まった米国空軍機による大都市攻撃は日に日に烈しさを増していた。仙台の通りでさえも、借り切った荷馬車に家財を山と積んだ隊列が安全な田舎に向かって行く風景があちこちに見られるようになった。翌年三月十日の東京下町大空襲の惨状が人々の口を通して拡がりつつあった。幼な児四人、老親二人を抱えた野口家に一部屋なりとも貸してくれる親しい親戚はなかった。わたしの父は大金をかけて幼稚園児のための防空壕を二つ掘った。しかし五十人いる園児を守り切る確信はなく、六月に閉園した。その判断は正しかった、けれども……。

勤めの時間を盗んで、志津子の父親は仙台市の西外れ八幡町の父（志津子の祖父）の親しくしていた寺の二部屋を借りる話をつけてきた。野口家の大人四人はここで一息ついた。引越しは七月十日、父親は疎開のための休みをもらう。その前に空襲がきた時は、夜間ならば父親は家に帰って

いる。彼は老父とまさるを連れて先頭に立つ。次に妻が双児の片方佳子をおぶい、むつきやミルク、子供たちの衣類、当座の米の風呂敷包みと水筒を持つ。最後にはあちゃんが帽子をかぶせた知子をおぶい、防空頭巾をかぶりねんねを着る。志津子も防空頭巾、リュック、水筒を忘れぬこと。

しかし敵機は野口家の引越しを待ってくれなかった。

七月九日夜、両親は一人一人の持ち物を点検し、ラジオを聞いていた。老親たちも起きていた。九時過ぎ、警戒警報は鳴らなかつたけれど、ラジオはB29数十機が松島湾上空に集結しつつあり、と放送していた。志津子の若い父親はのんきな人ではなかつた。印刷の職人は決して油断などしない。

「志津子、空襲くるぞ、起きろ」

肩を強く揺すられて、志津子はしぶしぶ起き上がってセーターを着て、赤いズボンをはいた。母が縫ってくれたズボン。枕もとにはリュック、水筒、防空頭巾、手袋がきちんと置いてある。暗闇に近いが、手探りですぐわかる。母が、おろおろする祖母の背に知子をおぶせベビー帽をかぶせ、ねんねこに腕を通してやっている。東の空が明るくなり、警戒警報のサイレンと市役所の向こうに火の手が上がったのは、ほぼ同時だった。地響きがする。勝手知った印刷機の横を、志津子は赤ちゃんの手を引いて入り口の土間でズック靴をはき、ばあちゃんがはき終わるのを待った。外は昼

間のように明るい。ゴーツと火のかたまりが落ちてくる。やっと両手に風呂敷包みと信玄袋を下げてたねんねこの母親がとび出しきて、父親たちと急ぎはじめた。泣きはじめたまさるの頭をごつんとたく。ふだん母親はそんなことしたことがない。

「知子、だいじょうぶだよ」

びっくりとも動かない妹の背中を志津子はなでた。隣と向かいの家が燃えている。父親がいちばん大事にしている機械も燃えるんだらう。あたりが煙でよく見えない。父と母において行かれたらどうしよう。

「かあちゃん」と呼んだ。その時ばあちゃんが、ものすごい恐ろしい悲鳴をあげた。防空頭巾とねんねこが燃え上がった。志津子の防空頭巾も熱い。駆け戻った母が志津子の防空頭巾をむしり取り、焼けはじめた髪の毛に水筒の水をざぶりとかけた。上衣も燃えてかかっている。ばあちゃんがばたんとコンクリートの上に知子と一緒に倒れた。ものの三分。父親が駆け戻って、志津子を抱きとった。

「痛いよーっ、熱いよーっ、ばあちゃん、知子ーっ。水ちようだーい」

志津子は泣きつづけた。

夜が白みかけたころ、祖父、父、母、志津子、まもる、双児の佳子は、生きて八幡町はずれの寺に辿り着いた。叫び続ける娘を妻に渡すと、父親はすぐ母と赤ん坊の遺体と医者を探してとび出し

て行った。志津子をあれほど可愛がった祖母と赤子を、落下した爆弾が不幸にも直撃したのであった。佳子をおぶった母は泣きながら、娘に水を飲ませ続けた。

その夜、松島湾上空に集結した米軍の爆撃機B29百機は、まず仙台駅前、東一番丁、二番丁を火の海にすると、市役所周辺の国分町、二日町、両親とわたしの住む勾当台こうどうだい通りの高い塔をもつ教会堂などを標的にしたらしい。その圏内にもちろん野口印刷所もあった。

ライト式建築、三角屋根の教会堂は美しかった。礼拝堂に幼稚園舎が続き、いちばん奥の牧師館に父母とわたしが住んでいた。幼稚園の庭にはすべり台、カーブランコ、砂場があり、近隣の子供たちの格好の遊び場にもなっていた。わたしもよく小学校の友達を遊びに連れてきた。半世紀後に再会した当時の友達、あの階段をのぼって、高い塔から遠くを眺めた楽しさを話していた。二階建ての牧師館は、いつ誰が訪ねてきても迎えられるように、戸締まりされたことがない。

印刷所も牧師館も市の中心部に近かったことが悲劇のもとになったか、とわたしは考えたものである。特に高い教会の塔は、数日前、米軍の偵察機が三機、仙台市の上空を旋回して飛び去った時、カメラの画面にはつきり残されていたという。

一九四五年六月一日から、わたしの学年も近郊の軍需工場に学徒動員されていた。六月二十二日、最後の生命線といわれていた沖繩で日本軍が全面降伏した。次は米軍の本土上陸であった。工場から戻ったあの夜も、わたしは父と暗い灯りの下で、一時間ぐらい数学の勉強をした。こんなことし

て何になるの、とわたしは言うのと、父は静かに「いつできない日がくるか、わからないだろう」と言った。彼は晩年生まれた一人娘を、当時の難関校、東京女高師（お茶の水）か東京女子大に入れ、やっと女子に門戸を開いた二つの帝国大学、九州帝大か東北帝大に進ませるとの夢を持っていたらしい。本人には言わなかったけれど。

七月九日の同時刻、母と二人で行き当たった無人の二階家の玄関前におかれた水槽に、母はわたしをざぶりと沈めた。といっても水槽はわたしの肩までの大きさしかなかった。四方から火が迫っていた。母は死を覚悟していた。娘だけはひよつとして助かるかもしれない。傍で自分は死ぬ。しかしその二階家が燃え出した時、十五歳のわたしは、母と死ぬしかないことを知って水槽を出て火の中を走り抜けた。母も一緒に。動員の日、工場から支給された厚手の作業服とズボンをわたしは身につけていた。厚手のずぶ濡れの生地は火をはじいた。そして母のきていたメリンスの上着ともんぺは火を全身に呼びこんだ。服から露出した顔面と手首を火傷やけどしただけのわたしと母の生死は、ここで分かれた。三週間もだえ苦しんで、母はなくなった。水槽の水と母の愛が娘を守った。父がひと足逃げおくれた理由を知る人はいない。彼は人生をかけた教会堂をひと目見て行こうとしたのかもしれない。一刻の判断で生死が分かれることは常にある。緊急時には。彼が妻と娘と一緒に行こうとした時、出るべきところはみな塞がっていた。翌朝、園児のために造った大きい防空壕の中

で、近隣の数人とともに父の焼死体が発見された。

敗戦直後の日本は、あらゆるものが最悪だった。わたしは野口一家がどこに住んでいるかを知らなかった。一度だけ両親の墓が知人によって建てられた式の日、やつれ蒼ざめた野口氏の顔をちらりと見た。彼は母と赤ん坊の葬儀をお寺でしたのだろう。大好きだったわたしの父とあの会堂でしかかったであろうに。会堂も牧師も灰になって、この世にはない。信じて祈る気持ちも失せている。しかし彼は父親であった。生き残った息子と赤ん坊が無傷なのは、幸運だった。借金を重ね、仕事を再開した。娘のケロイドを癒やしてくれそうな病院を尋ね歩き、小学三年、四年の志津子は度重なる手術、入院にも黙って耐えた。野口家と教会の縁も切れてしまった。あれほどに親しく往来していた同士であったのに。「リングの唄」が街に流れていた。わたしは入院も手術もしなかった。それだけ火傷の部位は少なく、浅かったのだと思う。

3 平和が戻った

キリスト教主義の女学校には、聖職者の家族は授業料を免除するという明治以来のきまりがあった。おかげで「戦災孤児」という肩書をあまり周りに感じさせずに、わたしは女学校を五年で卒業

し、別に気が進んだわけではないが、三年制の専攻科英文科に進んだ。勉強はほとんどせず、伯母と二人の食事を作り、本を読み、遊び歩いていた。破格に恵まれた戦災孤児であった。米軍占領によって、日本の学校制度は、耳新しい六・三・三・四制に変わった。

専攻科二年になった春、中学一年生に思いがけなく、野口志津子が入ってきた。新制度の共学・義務教育の中学がどの町にも建てられている。経済の負担も少ない。ただ共学になじみのない、ゆとりのある親の中には、娘をわざわざ私立に入れる家も少なくなかった。たぶん志津子の親が昔からなじみの深かったミッションスクール（今はそうではないが）に志津子をやるうと思っただのは、自然であったかもしれない。でも志津子に会いたいとは思わなかった。そもそも彼女がわたしを覚えていたかもわからない。六年の開きはかなりのものである。

これも占領軍のお達しで、全国の学校に「生徒会」なるものができた。生徒の総意から出たというよりは、上からの命令である。専攻科は関係なかったが、全校生徒千人がチャペル（講堂）に集められ、院長になったヴァージニア出身のミス・メアリーの民主主義についてのスピーチを聞いた。そのあと、中学一年から高校三年までの生徒会長が一人ずつ立って挨拶をすることになった。なんと、中学一年生の生徒会長は野口志津子。彼女は千人の全生徒に向かって立ち、にっこりして頭を下げ座った。一年生がいつせいに拍手した。志津子は人気があるのだ。涙が出そうだった。顔の右半面には、紛れもない火傷の痕があった。彼女は臆していなかった。なんていい子に育ったんだらう。

彼女に注がれたであろう両親の心痛と愛情を思った。生まれたばかりの志津子。眼をまん丸くして、クリスマスツリーを見上げていた志津子！

しかし校舎は別々で廊下で会うこともなかった。わたしは回り道をしながら、ほかの大学に行き、志津子も中学を終わると、県立第一女子高に移っていったと聞いた。難しい大学を目ざすならその方がいいと、誰かがアドバイスしたのか、本人が希望したかはわからないが、どこにいてもあの子はやっていくだろうとわたしは思っただけで、またも縁は切れてしまった。疾風怒濤の時代がわたしにも来ていた。青春だった。

一九五五年春、大学の卒業式がすむとすぐ、わたしは東京で働くことになっていた。三月のはじめのある日、何気なく新聞を開くと、東北大学入試合格者の名前が並んでいた。その中に理学部物理学科の男子合格者の間にたった一人女子の名前、野口志津子を見て、わたしはしばらくぼんやりしていた。医学部合格者なら驚きはない。一女からは毎年浪人を含め二、三人の合格者は出ていたと思う。物理学科はどうなのか、わからない。ただ長年のご無沙汰だから、やさしい笑顔の中一の志津子と物理学がどう結びつくかわからなかったのだ。

一女高とわたしと伯母の住居は目と鼻の位置だった。開花には間があるとしても、うららかな陽が射していた。引越し準備であたふた坂道にかかった時、向こうから下りてきたのは制服姿の志津子だった。よく知りながら口を大きくことがなかった、不思議な成り行き、傷を負った自分たち。

「おめでとう。えらかったわね、たくさん勉強したんだ」

「ありがとうございます。これからよろしくお願います」

嬉しそうに彼女は頭を下げた。わたしたちは初めて面と向かって話したのである。それでも彼女の様子は、昔からよく知っている者への話し方だった。いや、それ以上かも。でも自分は、じき仙台にはいなくなる。

「しっかりね」

ありふれ過ぎて我ながらうんざりする言葉だったが、突然だったから仕方がない。同じ学校の敷地にいた時さえ、一度も会わなかった志津子なのだ。とにかく、生き生きと美しい少女であることは確かだった。彼女にわたしがどう見えたかはわからないけれども。

4 再会

運命は自分が作るどころと、思いがけぬ偶然が働くところが絡んでいる。わたしの女学生時代、大学時代の友人も、四十代になった。戦中と戦後を共にした友人の消息は誰かしらが教えてくれる。わたしは山形市で家庭を持ち夫と子供三人とともに生き、英語を教え、もの書きのサークルに属している、と聞けば、人は少女のころひどい目に遭った彼女も落ち着いた暮らしをしてる、とほっ

としてくれるだろう。自身は全然ほっとなんかしていないのだが。ほっとできない自分の中に、消息のわからない志津子もいる。きつと理学部は卒業しただろう。その先がわからない。共通の友人知人がいないのである。彼女の父親は戦後、教会とのつながりをぶつりと断った。電話帳にも野口印刷所は載っていない。一事を考え続ける余裕はないのに、志津子が離れない。

ある時、はたと気づいた。簡単なことだ。大学にきけばいい。個人情報という語さえ存在しない時代だった。大学理学部は五分もたたないうちに志津子の住所と職場、両方の電話番号まで教えてくれた。彼女は水戸市に住み、日立の研究所の研究員をしていた、なるほど。相変わらず男性絶対多数のところかも。結婚してるかな。とにかく、自分を生きていてくれると良い。

翌日、電話した。若い声の男性が出た。

「野口さん、電話っ」

上からのものに言いに聞こえる。感じ悪い。

「はい、野口です」

落ち着いた声だ。

「ああ、愛子さん。昨日愛子さんのこと考えてたんですよ」

「何、それ？」

何を話したらいいかも考えずにかけた電話だが、意外な言葉だ。嬉しいとか懐かしいとかの感じ

ではないが。職場だからか、彼女が理系だからか。

「用件はないのよ、いらっしやるどころがわかったから、どうして居られるかと思って」

そして夜、もう一度、アパートにかけるところにした。一人暮らしをしていることがわかった。よく知った相手。珍しいなどと、ぜんぜん思っていないようだ。その夜、彼女はしばらく入院している、昨日退院したのだ、と言った。

「えっ、どうしたの」

ときき返しながら、とっさに精神病院か、と想像したわたしはどうかしている。

「乳癌です。自分でおかしいと思って検査してもらったら、やっぱり癌で、すぐ手術になったんです。誰にも話しませんでした。一人で入院して手術して寝ていました」

淡々と彼女は言う。父親は数年前になくなったが母親は元気で、宮城野区の市営住宅に住んでいる。年末年始には毎年帰る。関係が悪い様子はない、それでもこういう危急の時、彼女は職場の誰にも告げず「一人」を選んだ。そして不思議なことに、遠い記憶の中にいるわたしを思い出していたと言う。幼い彼女の手を引いて、クリスマスツリーの前に連れてってくれたお姉ちゃんのわたし、春の日、大学合格おめでとうと喜んでくれたわたしか、同年同時刻に同じ地獄にいたわたしか。とにかくそれ以上、彼女は語らない。いとおしさが残った。

それ以来、彼女は年末年始で仙台に帰った時は、山形に来てくれるようになった。二人で蔵王に行ったり、街を歩いたりした。彼女には一女高時代の仲良しが仙台に数人いるから、短い休暇はすぐ終わる。それでも何とか時間を作ってくれる。なんで物理を選んだのときくと、数学が好きだったからと言う。のみ込めない顔をしていると、「父親からしょっちゅう、山田さん（牧師であった父）は数学のできる偉い人だったと聞かされたのね。それで数学のできるのは偉いことなんだって刷り込まれて勉強したから、好きになったんでしょうね」と笑う。彼女の父親はたぶん商業学校か工業学校出身かと想像するが、わたしの父を大好きだったことは、それでわかった。わたしは数学なんかさっぱりだが、志津子が小学三年で途切れた記憶にせよ、わたしの一家をただの他人と思わない理由はのみ込めた。彼女の父親が、わたしの父の死にどれほど力を落としたか、父と娘のわたしの話を折にふれてしていたことがわかった。わたしもまた彼女にとっては、ただの他人ではなかったのだ。

団塊だんかいの世代より志津子は十年以上、年長である。大学卒業後、就職口のなかったのはクラスで志津子一人だった。金属研究所で何年腰かけ仕事をしてきたか、わたしは知らない。ようやく現在の職を教授が見つ付けてくれた。大学以来ずっと身をおいた男社会について愚痴めいたことを一言もいわなかったけれど、一度か二度もらした言葉は忘れない。

「難関、一流大学を出た男の品性が上等なんてことは絶対ない」

その通りとわたしも思う。彼女は苦労してきた、たぶん。しかし知的で気立てとセンスの良い彼

女を理解し、近づいた男性は一人もいなかったのか。何のきっかけであったか、珍しく書いてきたことがあった。ヴォキャブラリー不足の志津子！ すごい読書家なのに。

「一度一緒に暮らした男性がいました。でも私が一番好きなのはやっぱり一人でいること、それがよくわかりました。彼がいると、一人になりたくて、どうしても一人でできる外歩きに時間をとられてしまったものです」

「本当の恋愛なら、一時間でも長く一緒にいたくなるもの。その人をほんとに愛していなかったせいじゃないの」とわたしは言いたかったが、黙っていた。相手の男性を全く知らないのだから。

わたしの長女は、志津子を好きだった。東京の学生時代は泊まりにも行った。マルグリット・デュラスについての修士論文を書いていた娘は、「志津子さんもデュラス、好きなんだって」と嬉しそうだった。

「志津子さんすごいよ。『失われた時を求めて』（ブルースト）十巻全部読んだのよ」と言っていたこともある。わたしは誰の翻訳かは尋ねなかったが、『源氏物語』五十四帖全部を読んで面白かったと聞いた時も感心した。ラブストーリーならいくらでも読むのに、と思ったが口にできなかった。

志津子は定年後、仙台に帰り、三年後に母を見送った。母校の百年史の編纂の実務の週三日のアルバイトを三年以上した。中学の三年間を通ったところだ。そのころ、わたしの夫がなくなり、恋

愛のもつれで精神不安定になっていた長女が山形に帰ってきた。娘は妹やそれまでの友人たちとのつながりを、みな壊してしまった。志津子との電話のおしゃべりもしなくなつた。志津子と娘は体型が似ていた。小柄で細い。志津子は着道楽と自分で言っていた。お古をねだつた娘に新品みたいな素敵な洋服を何枚も送ってくれたこともある。でも統合失調症は人格の病気である。わたしは仙台に行つて友達に話を聞いてもらいたかったが、その余裕もなくしていた。もともと志津子と娘は繊細でむずかしいところが似ていた。志津子は母（わたし）の昔からの友人で、娘にとつては何でも話せる人であったのに。関係を病気が切つてしまった。震災の二年後、娘が死んだ時も、志津子にそれを知らせる気力は、わたしにはなかった。

一年半過ぎてようやくわたしは、彼女に娘の病氣と死のいきさつを書いた。返事がきた。

その頃、電話が三回かかってきて、三回ともとるとすぐ切れました。あれはあやちゃんからの天国からくれた電話だったと今は思うことにしています。

ああ、わたしなら友人から同じ知らせをもらつたら、こんな短い返事で終わらせはしない。しかし志津子は彼女なりに心をこめて書いてくれたのだ。わたしたちは同じ人間ではないのだから。また時間が過ぎた。

今年の元旦、五年ぶりにハガキを出した。どっちも八十歳を過ぎ、友人は日に日に減っている。彼女は無事だろうか。病氣をしていないだろうか。ところが受取人不在のスタンプでハガキが戻つ

てきた。表書きをまちがえてはいない。別のハガキを二通出したのに、どっちも戻ってきた。悪い予感がする。高齢者の一人暮らしは、人にこういう不安を与えるのだ。電話をした。志津子の同じ声が出た。変わりなく暮らしていると。何にも依存せずに。ハガキが三回戻ってきたと言うと、驚いている。わたしのアドレス帳はF町5―23となっているが、5―23―105がほんとで、部屋番号が抜けている。抜けたままでもこれまではちゃんと何でも届いてたと二人で不思議がる。ほっと力が抜けたが、彼女は「郵便局に文句を言わなければ」と怒っている。それはいい。一方で彼女は「愛子ちゃん、元気で良かった」と喜んでいいる。心配で遠慮で連絡できなかった、というのが志津子流か。彼女は毎日、往復きちんと二時間、同じコースを歩いている。

「そうそう、北星教会の前を通るのよ、そこでパンを買うの」

わたしの父が命がけて愛し、志津子の父親が利益を無視して尽くしたところ。影もかたちもなくなり、信徒たちが焼け跡の土地を売り、別のところに元の半分の面積の土地を買って再建した教会。わたしは年に一度だけ、墓前礼拝と墓まいり、昔の友人たちに会いにイースターにはそこに行く。両親、伯母、夫、娘の眠る墓地だ。志津子の家族とは関係がない。ただ、今、わたしと話すうちに思い出したのだ。

「わたしは年に一度、イースターの墓まいりに、あの教会に行くのよ」

「あたしも行ってみようかな。今年のイースターはいつ？」

「まだわかんないと思うけど」

「調べればわかるわ。愛子ちゃんに会えるもんね」

ほんとに来るかしらん。思えば人の集まるところを彼女は好きではない。ただし、行かなければならない時は落ち着いて出かける。でも今のは思いつきの話だから、きつとこない、とわたしは思った。彼女はきちんと孤独を生きているのだ。イースターの日付は、その年の星の移動によって変わる（まちがってるかも）から決まっていない。ここ数年は三月下旬だったが、今年は四月下旬だった。案の定、志津子は現れず、墓前礼拝、墓まいりのあとは、信者の同級生の家で夕飯をご馳走になり、もう一人の友人の家に泊まり、翌日はその二人に駅まで送ってもらった。

五月に入って、来客とお茶をのんでいた時、志津子から突然電話がきてまごついた。イースターには、その日を忘れて礼拝に行かなかったとひどく申し訳ながっている。約束を破るって、彼女にはとても悪いことなのだ。わたしは笑って受話器を置いた。律儀である。今度は来客中でそそくさと電話を切った自分を悪かったと思いはじめた。彼女が電話をくれるのは、めったにないことであつたから。

五月は竹の子の季節だ。野菜と卵を毎週届けてくれるところから、また友人から毎年届く。とても食べ切れないから、好きだということにお裾分けする。志津子に送ることを思いついて、きげんが良くなった。パウンドケーキを焼く。

二〇一八年はわたしが昔から愛読してきた作家、堀田善衛ほったたよしえの生誕百年にあたっていたらしい。二十世紀末、彼がなくなつてから、ほとんどその名を聞かなくなつたが、秋ごろから珍しく彼についての著作が二冊出て、今年になつて両方買った。読み終えた一冊と橋本治の、息子が送つてくれて面白く読んだ『知性の顛覆てんぷく』の新书を入れて、宅配便にした。一ヵ月たち、札状が来た。二枚、とても嬉しそう。わたしもすごく嬉しかった。そのことが、この一文を書いたきつかけだ。

ここ半世紀、戦後派の大作家・堀田をいくら良いと言つても、なかなか読む人のいなかった彼の作品に素早く反応してくれる人がいて、それが志津子だった嬉しさだった。もちろん彼女は竹の子とケーキも喜んでくれた。高齢化で大ていの友人が遠ざかつた人だからでもある。以下は文面の一部。

二冊の本の著者は、これまで読んだことなく発見でした。堀田善衛は本当のインテリですね。さっそく行った図書館には名札すらなく、又丸善では探せませんでした。いつも行く古書店で「上海にて」と「めぐりあいし人びと」の二冊だけあったので求めました。堀田氏の約四十五年後、私は上海に行つたことがあつたので、とくに面白く読みました。フランス租界、ホテル、名前は変つても変わらずありました。それにしても国民党が中国人をこんなに殺したとは！ また、①日本の天皇は、終戦の言葉の中に、中国などの人々に迷惑をかけたなどの言及が全くない。②東京の焼野原にピカピカの高級車が停まり、天皇が降りてきてすぐ立去つた。堀田氏の言葉はとてことえます。

(註) 敗戦の八月、堀田善衛は上海にいた。

ああ、これまで志津子は、わたしにさえ、彼女に生涯消えぬ傷痕を残し、二人の肉親を眼の前で殺した戦争と人間への怒りと痛みを語つたことはない。恐らく家人にも友人、知人にも。わたしも一九七三年まで、人には絶対口を開かなかつた。戦争被害者としては、わたしも志津子もかなり恵まれた子供であつたのは確かである。しかし彼女の微笑と沈黙の下に沈んだ痛みの深さを誰が知ろう。長いあいだ、わたしは彼女を妹のように思つてきた。彼女は知っていたかも。しかしお互いにそんなことはひと言も言わなかつた。

志津子とわたしと、どちらが先に死ぬかはわからない。順序としてはこちらが先であろう。その時はあとからの通知を上げるだけでいい。この一文も見せることはない。彼女の終焉しゆうえんが先である時、わたしはできることならその近くにいたい。恨みや怒りの一言もなく静かに一人の人生を彼女が生き切れるように。その時までの生き方と変わることなく。